

平成 22 年度第 2 回札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

平成 22 年 7 月 7 日 市民文化課

前回会議内容をとりまとめた資料について佐々木委員長から説明があり、それをふまえて議論を行った。また、市長との懇談を想定した活動報告書の作成について意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

【「アートの産業化」のまとめ（佐々木委員長）】

- 前回欠席してしまっただが、会議の発言要旨を確認し、皆さんがお話したことを手書きのペーパーにまとめてみた。
- 行政や市民、アーティスト、企業など各芸術文化にまつわるステークホルダーがあるなかで、それぞれの関係性の議論が重要ではないかと考えた。
- 行政に関する部分では、市長直轄の横断的な組織ができたこと。行政に圧倒的に期待されているのは財政的な話と横断的な組織が機能できるのかということ。
- 蔵委員が言っていた文化行政の過去の 30 年間の総括について、今までこの会議の中では議論していなかった。円卓会議として、何ができて、何ができていないのかについて、札幌市の中に特化して何かコメントを残したいと考えている。
- 次に、市民についてだが、市民の生活における芸術の位置づけを変える姿勢が必要だと考えている。市民にとって芸術は、お高いものに触れる姿勢ではなく、もっと身近で当たり前のものになるようにしなければいけない。行政と市民のかかわりについては、文化行政は総花的なアプローチが多く、行政と市民を機械的に区分している。両者の共同というものが見えてこない。特にこの点についてはアートセンターに期待する部分ではある。市民の姿勢を変えるためには、一つイベントをやるだけでなく市民の行動様式が変わるようなものでなければいけない。
- 次に、アーティストについて、斎藤委員から頂いた意見である、観客の創造、社会問題の解決、トップランナーを生み出すことを記載してみた。

- アーティストに関する情報は、皆さんの意見の中ですごく少なかったように感じる。企業についてもそうだが、この辺について補足情報があればいいと思う。
- 社会問題の解決につながることだが、中津委員の話していた日常的な市民へのアウトリーチ活動などが考えられる。アーティストが市民と関わることで社会的な問題の解決につながるだろうし、新たな観客創造にもつながる。
- 人材の集積、育成を行うことによりプロデュースやマネジメント能力を持つ組織を作るということも大事。例えば、大学の創設。そういった人たちが観客創造に貢献できる。観客と市民が機械的に区分されている状況に対して共同を促進するような機能を果たすことができるのではないかと。
- 新堀委員が話をしていた「なぜ、市民にとって芸術が必要なのか。」という問いには、答えを出す必要があるのではないかと感じた。
- アートの産業化については、経済的にお金をまわしていくのではなく、芸術家の暮らしを今とは違う状況にしていくという認識であるということについても示した方がよい。(以上、佐々木)

【「アートの産業化」のまとめに対する意見】

- 以前、新堀委員が話していたオンブズマンの話を加えた方がよい。(中津)
- 芸術家が自立するために邪魔となるものについての話。貸しホールの利用料はチケットの値段が上がると比例して上がってしまう。(中津)
- アートの産業化という切り口で議論してきたが、このペーパーを見てもわかるように、それだけのことが書かれているわけではない。札幌市のこれからの在り方を示している。(佐々木)
- 何が一番大事かを考え、どういった仕掛けが必要かという具体的なものを3～4つ提言できればよいのではないかと。(大平)
- 皆さんが考える重要な項目を一人3つ程度提案するとしたらどういうものになるか。(佐々木)
- 芸術文化に関する継続的な調査、「我が街の劇団」を持つための先行投資、助成金システムの見直しなど。(斎藤)
- 助成金システムの仕組み、人材がどれだけいるか、情報の流れの3つ。(大

平)

- 芸術イベントの複合化、イベント情報の集積・可視化、小中高生を対象としたアート教育プロジェクトなど。(中島)
- ファンドレイズの手法、子供たちの教育、観客創造、情報発信など。(中津)
- 項目を挙げることにあまり意味はないのではないか。「アートがなぜ市民にとって必要か。」といったことに答えてから進んでいった方が良い。一つの方向性としてアートの産業化という切り口で示していくのも良い。足りないものとしては、過去のデータの蓄積がないこと。年鑑などを作っていくことが必要。市民に対するメッセージ、発信力が必要である。(早川)
- なぜ、芸術は必要かという問いに対してはどうか。(佐々木)
- 人は、衣食住だけで生きているわけではない。行政が芸術に力を入れていくことが当たり前の社会でないと本来の先進都市ではない。創造都市なら、文化や芸術に目を向けなければいけない。30年前から言われていることだが、ものの豊かさを追求する時代ではない。心の豊かさを追求する時代である。(蔵)
- アートの必要性はそもそも経験しなければわからないもの。(大平)

【活動報告書の体裁】

- 我々円卓会議委員の任期は2年であるが、次の円卓会議委員の任期なども考慮すべき。(斎藤)
- ざっくりとしたいい方になるが、パンチのあるものを書きたい。総花的ではないものにしたい。第2期、第3期と今後続いていく、円卓会議の指針を定めておきたい。(早川)
- もともと成果物をまとめるための会議ではないはず。個人的には成果品をまとめることにエネルギーを費やす必要はあまりないように感じる。市長との対談に必要となるペーパー程度があればよいのではないかと。我々は円卓会議の一期生として、札幌市のアートの現状はどのようになっているのか、他の政令指定都市と比較してどうかなどについて調べていないので、その辺について掘り下げていくべき。それにより将来的にどうすべきかというものが見えてくる。それを2期生や3期生に引き継いでいけばよいのではないかと。事務局側も色々な議論を忌憚なくやってもらうことを期待しているのではな

いか。(中島)

- 最終的に文化芸術が私たちにとってどういうものであるのか、そこで期待しているもの、そのために考えられることを出せばいいと思う。現状に対して鋭く意見したい。(阿部)
- 今お話頂いた内容を整理すると、第2期、第3期円卓会議に継承できるようなペーパーの作り方というのが共通の認識だと思う。(佐々木)
- 市民にメッセージを伝えることは必要ではないか。そのために芸術家が飯を食べていけるように産業化が必要。それ以前に、今行政に欠けているものを正す必要があるという話。(佐々木)
- 基本を述べて、今の札幌の芸術文化活動の問題点を指摘して、さらに札幌が発展していくためにどうすべきかという三段構えがよいのでは。(大平)
- 早川委員と斎藤委員と私の3名で今月中を目途に報告書のアウトラインの作成を行い、各委員の意見を盛り込むという手法で進めたいと思う。(佐々木)